

日本質的心理学会

第2回大会 アブストラクト集

2005年9月8日(木)・9日(金)

於 東京大学 本郷キャンパス
東京大学大学院 教育学研究科

看護学における質的研究手法の教育方法

—量的研究手法のように教育可能なものか？否か？—

企画者：日本質的心理学会研究交流委員会

司会者：操 華子（聖ルカ・ライフサイエンス研究所）

話題提供者：高木廣文（新潟大学）

竹崎久美子（高知女子大学）

西村ユミ（静岡県立大学）

指定討論者：尾見康博（山梨大学）

鈴木智之（法政大学）

森岡 崇（慶應義塾志木高等学校）

看護基礎教育ならびに大学院教育において質的研究手法への注目、関心は非常に高まっている。研究法の授業では量的研究手法と同様に質的研究手法にも重きがおかれ始めている。また、臨床の場では、質的研究手法こそが自分たちの看護を語る上で欠かすことができない研究手法であると認められつつある。現に、筆者が勤務している病院の研究審査委員会（Institutional Review Board: IRB）に提出される研究計画書の中で、ナース主導の研究計画書の7割近くが質的研究である。

かつて、グラウンデッドセオリー・アプローチを用いた、理論構築を目的とした質的研究の計画書を審査したことがある。約3ヶ月間のデータ収集期間中に2つの病院に入院した意識障害のある患者の家族を対象に、インタビューと参加観察を行う予定となっていた。理論的飽和に達した時点で患者リクルートは中止すると書かれている一方、予定リクルート患者数15名とあった。また、患者の家族1名に対して3回の面接が予定されており、面接だけでも45回となる。つまり、2日に1回は患者家族と面接をする予定になる。グラウンデッドセオリー・アプローチの特徴の一つは、データ収集とデータ分析を同時に行っていく点にある。これにより次のデータ収集時の面接内容を洗練させたり、深めたりすることが可能になる。しかしながら、上記の研究計画では、本当に紙面上の計画だけで終わってしまうことになりかねない。Flickら（2004）は、大学院の修士レベルの質的研究でも理論構築を目指す内容を含めるのは非現実的であると指摘している。研究テーマ、研究課題としては重要なトピックを選択しているにもかかわらず、具体的方法論の段階までくると、実行不可能な質的研究の計画書は決して少なくないのではないか。このことは、現在の看護学における質的研究手法の教育の現状を反映しているように思える。

このように、医療現場における質的研究への関心の高まりに迫いつかず、その方法論の教育、指導は不十分なままのように思える。そこで本シンポジウムでは、医療現場において、特に看護職者が関心をよせている質的研究手法の教育方法、指導方法についてとりあげたい。質的研究手法は、量的研究手法の教育と同じように行うことはできないのか。できないとすればどのような教育手法が必要なのか。臨床ナース達が質的研究手法をどのように身につけていくことが可能なのか。これらの問いへの答えを本シンポジウムで模索したい。話題提供者3名の方々には以下の立場から、お話いただく予定である。

- ① 質的研究手法を看護系大学ならびに大学院で教えている立場から（新潟大学 高木廣文氏）
- ② 質的研究手法を看護系大学院で学んできた立場から（高知女子大学 竹崎久美子氏）
- ③ 質的研究法を用いて臨床看護師とともに研究を行っている立場から（静岡県立大学 西村ユミ氏）

文責：操華子

質的研究法と量的研究法の統一的教育を目指して

高木廣文（新潟大学医歯学系保健学系列）

Ⅰ. 看護研究のエビデンス性の要求

EBM（Evidence Based Medicine）の重要性が広く認識されるにつれ、看護学でも EBN（Evidence Based Nursing）の考え方と実践の重要性が認識されるようになってきた。しかし、EBM の「エビデンス」が「医療の実践での科学的証拠」となる研究成果を指すことから、EBN でも狭い範囲でエビデンスを捉える傾向にあるように思われる。

我々は EBN と看護研究について、2001 年と 2003 年の 2 度に渡り、看護系大学教員を調査対象として全国調査を実施した^{1, 2)}。EBN の重要性については、第 1 回目は約 8 割、2 年後の第 2 回目には約 9 割が肯定的に回答していた。89.1% が看護研究を行っており、85.9% が量的研究を、72.2% が質的研究を、61.2% が両方とも行っているとは回答した¹⁾。興味深いことには、看護研究について、量的研究が向いているとする回答が 44.1% であるのに対して、質的研究が向いているとするものは 66.7% であった¹⁾。

EBM や EBN でのエビデンス水準は、量的研究を前提に考えられており、質的研究のエビデンス水準について、その物差しを当てはめるのは無理がある。このため、質的研究のエビデンスを考える場合、新たな物差しが必要である。量的研究では、妥当性と信頼性がその研究の質を考える上で重要である。一方、質的研究においては、「信憑性」が研究の評価基準になるかもしれない^{3, 4)}。

研究によるエビデンスの必要性は、量的研究では当たり前のことであり、議論の必要すらないだろう。一方、質的研究においては、研究対象となる現象の一回起性から、再現性や検証可能性を問題にしないという意見もあるだろう。しかし、西條は関心相関的アナロジーによる「継承」という考えから、質的研究においても、結果の比較や一般化などのための検証が可能であることを示している⁴⁾。このような考え方は、まだ一般的ではないかもしれないが、質的研究のエビデンス性を考える場合に重要であろう。

Ⅱ. 質的研究の大学・大学院教育での現状⁵⁾

量的研究法は、科目名は異なるものの、統計学や医療統計学などで大学・大学院でほぼ全員が何らかの形で学習の機会はあるが、質的研究法についてはどうなっているのだろうか。

看護系大学教員を調査した結果では²⁾、大学で質的研究法の講義を受けたとした教員は 34.2% であり、大学院の修士課程でも 53.2% であった。この結果からすると、質的研究法の教育は、大学でも大学院（修士）でも不十分であると思われる。そのためか、調査結果では、自己学習の経験を持つ者が 92.7%、講習会への参加 57.1%、勉強会や研究会の開催 66.6%、と他の機会に質的研究の学習を行っていた²⁾。

私が勤務する大学では、看護学専攻の学生が質的研究を学習できる科目は見あたらない。実際には卒業研究で質的研究法を用いる学生もかなり多い。そのため、卒業研究の開始直後に、看護研究法の概説として、量的研究法と質的研究法を授業外に各 4 時間行っている。極めて短時間であり、イントロのみで、後は各指導教員任せであるが、かなりの学生が質的研究法により、それなりに卒業論文をまとめ上げていた。質的研究法の理解には、かなりの自己学習と指導が必要なことから、動機付けとなるような授業の存在は、学生にとって重要である。大学院（修士）では、看護研究法（30 時間）で量的研究法と質的研究法の講義がある。まだ修了生がいないため、どの程度の効果があるのか、今のところ何とも言えない。しかし、修士論文の作成過程において、指導教員からの適切な指導があれば、学部学生とは比べものにならないくらい、質的研究法についての理解は進むものと期待している。

大学院生の指導上の問題は、看護研究の指導教員のすべてが、多様な質的研究法に精通している訳ではないことである。さらに重要な点は、学生や大学院生が質的研究を遂行するのに、十分な能力を有しているかということである。これらの問題は、すぐに解決できる訳ではない。当面可能な方法として、適当な科目で看護研究における量的研究法と質的研究法の概要を教授し、さらに教員、学生、院生ともに自己研鑽に励むことで、底辺の底上げを図るしか、方法はなさそうである。

III. サイエンスとアートの関係

質的研究法の教育での問題は、その研究結果の価値についても触れねばならないことである。前述のように、現在の EBN のエビデンス性は、量的研究法、それも統計学への適格性から水準が定められている。すなわち、研究対象の無作為性と研究事象の数量化は必須とされている。この点からいうと、質的研究による結果には、最低ランクのエビデンスしかないことになる。当然、このような意見には質的研究者の猛反発があるだろう。このような、研究方法論の相違による科学性やエビデンスについての考え方の相違、すなわち対立は深刻な問題である。ここで、このような対立の構図を少し考えてみよう。

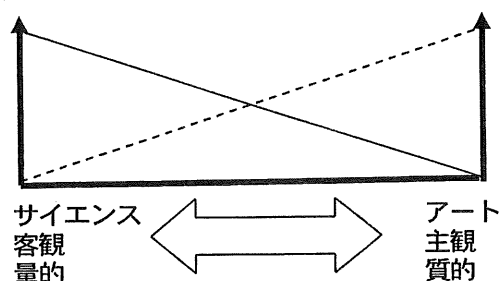


図1 対立か相補か

研究という構図が生まれてくる。このような構図からは、基礎と臨床、個人と集団、任意抽出と無作為抽出など、様々なレベルでの対立関係が生じてくる。このような対立は好ましいものではないが、量的方法と質的方法の対立関係を、相補的關係として認識するためには、どうすればよいだろうか。

看護は、サイエンスでありアートである、とよく言われる。この場合、サイエンスは看護の基礎となる科学的なエビデンスを意味するものだろう。一方、実際の臨床での技術的な側面はアートとして表現されている。この場合、サイエンスとアートは対立する概念ではなく、相補的なものとして提示されていると考えてよいだろう。しかし、図1に示したようにサイエンスを客観的、アートを主観的に捉えたと、対立概念になりがちであろう。

これがさらに、客観的なのは量的研究、主観的なのは質的

IV. 質的研究法と量的研究法の統一的教育の可能性

主観－客観問題のような信念対立は、質的研究と量的研究においても解決すべき問題である。この問題を棚上げにして、形式的な研究方法論の教育を行っても混乱を起こすだけだろう。西條は、研究における信念対立の問題を構造構成主義の立場から、関心相関的に研究手法を選ぶことで、解決可能であるとしている^{4, 6)}。さらに、質的研究による研究論文の作成について、その一般的な過程を提示している⁶⁾。構造構成主義による信念対立問題の解消は、極めて魅力的に思えるので、今後の看護研究法などの教育に有効かもしれない。また、質的研究で重要な役割をもつ中核概念の発見に結びつくような発想についても、関心相関的なアナロジーにより可能であることを示唆している⁴⁾。

しかし、問題がないわけでもない。構造構成主義が現象学的な背景から生まれているために、すんなりと理解できる訳ではないし、納得できる訳でもない。大学で教育を担っている教員の多くは、量的方法には優れていても、哲学的な素養が十分にある訳ではない。質的研究法の理解にその基礎となる哲学の知識がどの程度必要なのかという議論と共に、教育者の教育の必要性をも考慮すべきだろう。

参考文献

- 1) 高木廣文, 西山悦子: 看護系大学のEBNに関する意識調査(1)看護研究とEBNに関する意識, 第62回日本公衆衛生学会総会抄録集, 195, 2003
- 2) 高木廣文, 西山悦子: 看護系大学教員の質的研究に関する意識調査(1)調査概要と質的研究の学習経験, 第63回日本公衆衛生学会総会抄録集, 191, 2004
- 3) Flick, U: Qualitative Forschung, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH (Humburg), 1995 (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳: 質的研究入門－〈人間科学〉のための方法論, 春秋社(東京), 2002)
- 4) 西條剛央: 構造構成主義とは何か一次世代人間科学の原理, 北大路書房, 2005
- 5) 高木廣文: 看護系大学・大学院における研究手法の教育－量的研究法と質的研究法の統合的理解を目指して, インターナショナル ナーシングレビュー, 28(2), 47-51, 2005
- 6) 西條剛央: 質的研究論文執筆の一般技法－関心相関的構成法, 質的心理学研究, 第4号, 186-200, 2005

質的研究におけるアブダクションを考える

企画者 西山悦子（新潟大学医学部保健学科）

シンポジスト 竹村真理（新潟大学医学部保健学科）

修士課程での研究におけるアブダクションの経験

操 華子（聖ルカ・ライフサイエンス研究所）

看護研究におけるアブダクション：「AHA!」体験

高木廣文（新潟大学医学部保健学科）

研究上のアブダクションはどこから来るのか

1. 企画趣旨

看護学の領域において、質的研究への期待は大きく、質的研究による原著論文も増えてきた。また、その成果のエビデンスに関するディスカッションも学会等で取り上げられるようになってきた。しかし、質的研究では収集したデータから中核的なカテゴリー、概念などを思いつかなければ、それも多くの人が納得し、モデル構築がうまくできなければ、その研究は本当に完成したことにはならないだろう。

アブダクションについては、研究の過程で自然に浮かび上がるとか、もともと自分の中にあるので発見できるなどいわれているが、その機序については不明な点が多い。重要なアイデアや概念が何も無いところから生まれるのであろうか。それとも、アブダクションにもある種の法則のようなものがあり得るのだろうか。

本シンポジウムでは、実際に研究を行っている研究者から、自分の体験に基づく情報を提供していただき、質的研究におけるアブダクションの問題について広範な討論を行いたい。

（西山 悦子）

2. 修士課程での研究におけるアブダクションの経験

私は、「臨地実習カンファレンスにおける学生の沈黙と教師の関わり」というテーマで質的研究を行い、修士論文を書いたが、その時のアブダクションの経験を述べる。

私は日頃、学生主体の臨地実習カンファレンス中に、学生達の沈黙が続くことが気になっていた。沈黙されると、学習が進まないのので、私はなんとか学生の発言を促進したいと願っていた。カンファレンス中に学生が沈黙してしまう状態を作っているものはなにか、その要因を明らかにすることを目的としてこの研究を行った。

研究は以下のとおりに進めた。情報収集は、教員と臨床指導者と学生達のカンファレンスの様子をビデオ撮影した。教員と学生達の会話を逐語録にし、表情仕草等を付記した。分析方法は文脈から意味とその内容を解釈し、コード名を付けた。教師側から抽出したコード名は「情報の提供」「緊張緩和の試み」「確認して支援」「状況の解釈を説明」「実際と理論の関係を説明」「反応を見て促す」「言い換えて発問」「追求した質問」等であった。学生側から抽出したコード名は「意見の同意」「話し手の意見を傾聴」「発言者へのねぎらい」「否定的な感想を発言」「消極的な応答」等であった。

アブダクションについて自分の中で振り返ってみると、私の生きてきた生活体験（教育体験、臨床体験、実習指導体験、家庭生活での人間関係）から形成された価値観に基づく見方が、今までに読んだ文献（専門書、一般書）などから獲得した言語に置き換えられ、浮かんできたと思う。そのためアブダクションが自分の中で起きるときは、目の前に起こっている事実を読みとる自分の認知力の「浅さ」「深さ」によって言語化するわちコード化が変わってきたと思う。質的研究の結果の不安定さは、研究者の生活体験にかなり影響されると考えている。

（竹村 真理）

3. 看護研究におけるアブダクション：「AHA!」体験

アブダクションとは、帰納法、演繹法と並ぶ第3の推論法、思考法の手段である。今井は、演繹的思考は“must”の推論、帰納的思考が“actually is”の推論であるとする、アブダクションは“may be”の「当て推量」の推論であると説明している (http://www.mtc.pref.kyoto.jp/ce_press/no977/syothou-room.htm)。帰納法とは、「個々の特殊な事実や命題の集まりからそこに共通する性質や関係を取り出し、一般的な命題や法則を導きだす推論の形式」であり、演繹法とは、「一般的な法則から特殊な事実などを導くこと」、そしてアブダクションとは「特殊な事実から、それを説明しそうな仮説を作り出すこと」である（フリック、2002）。Peirce はアブダクションを帰納法、演繹法と独立させた推論法、思考法として捉えるのではなく、アブダクションによって得られた仮説は、その後続く演繹法、帰納法によって検証されるものであると捉えている。このアブダクションの特徴の一つに「AHA!」「閃き」「発想」がある。眼前の問題について熟考し、既存の知識や知見と結びつけ、文献などから先例を探すという知的活動を実施している間には名案が浮かばないことが多いが、疲れた頭を癒すために散歩に出かけるなど、脳全体の緊張レベルを低下させた時、意識なしに脳の中で行われている経験・知識の再試行の潜在思考によって「AHA!」体験は導かれるという (<http://www.icot.or.jp/cgi-bin/readgif.sh?TRHOME=/AITEC/Publications/TRTM/1/tr0721>)。

本自主シンポジウムのシンポジスト依頼が来るまで「アブダクション」という単語を耳にしたことはなかった。質的研究手法に強い友人に「アブダクションとは何か?」とメールで訊ね、アブダクション関係のサイト情報を送ってもらった。今もってアブダクションについて理解しきれたとはいえない。しかし、自身の体験からアブダクションが看護研究において重要な位置を占めていると実感している。「AHA!」体験から導きだされた仮説をいかに演繹法・帰納法を用いて検証していったのか、いくつかの研究例を紹介しつつ、看護研究におけるアブダクションについて話題提供をしたいと考えている。

(操 華子)

4. 研究上のアブダクションはどこから来るのか

現在、タイ王国でHIV/AIDSグループの人々が家族、友人、社会などをどのように思って生きているのかを研究している。面接を中心としたデータ収集のため、質的研究法の形態をとっており、データ解釈のために質的研究法の自己学習や勉強会を開催したりした。しかし、データのコード化からコア概念の発見に至るために必要とされるアブダクションについて、納得できる記載はほとんど見つけられなかった。

研究における推論の形態として、帰納的推論と演繹的推論は良く知られている。質的研究においては、データに基づいて帰納的に推論を行うとされている。しかし実際には、コア・カテゴリー、概念の発見、モデル構築などにおいては、第3の推論形態であるアブダクションが重要である点に異論はないだろう。

アブダクションは、西條¹⁾や川喜田²⁾などによる(1)アナロジーによる発想、と(2)ブレークスルーを伴う飛躍的発想、に大別できるのではないだろうか。言語化されたテキストデータをコード化し、類似するコードや概念から、その中核になるようなコア概念を探し出すのは、アナロジーによる発想といつてよいだろう。一方、アインシュタインの光子説のように、それまで誰もが波動と考えていた学説に真っ向から対立するような発想は、完全にそれまでの考え方と断絶があり、ブレークスルーを伴うような跳躍的な発想の例といえよう。しかし、このようなアブダクションも論理的な帰結でもあるのだから、アナロジーによる発想でもあるはずである。アブダクションを優れた研究者のアートとして捉えるのみではなく、サイエンスからのアプローチも可能なはずである。

量的研究が科学的研究としてより評価されている現状を踏まえても、新しい問題の発見やモデル構築などによるブレークスルーのために、質的研究への期待は大きいのだが、このデータ解釈におけるアブダクションを、誰もがアートとして学べるような基礎的な検討が必須である。

参考文献：1) 西條剛央：構造構成主義とは何か一次世代人間科学の原理，北大路書房，2005

2) 川喜田二郎：発想法－創造性開発のために，中公新書（東京），1967

(高木 廣文)